第26回

A DEAN MESSAGE

学部長メッセージ

今問われる「学び」の意味

国際教養学部長　安井 一郎

YASUI Ichiro
筑波大学（教育学修士）

■専　　門
教育課程、教科外教育

■担当科目
道徳教育の理論と実践
教育実習指導
教育課程論　等

新型コロナウイルスと大学における「新たな日常」

1月に日本国内で新型コロナウイルス感染者が確認されてから既に4ヶ月、この間、最前線の医療現場をはじめ、様々な場所で新型コロナウイルスとの戦いに尽力されてこられたすべての方々に心よりの敬意を表します。また、残念ながらその中でいのちを落とされた方々に深く哀悼の意を表します。5月末現在、日本では、ようやく沈静化の兆しが見えてきましたが、世界に目を向ければ、まだまだ感染拡大が続いている国々があります。「人類の歴史はウイルスとの戦いの歴史である」と言われますが、その戦いに勝利し撲滅できたのは天然痘だけと言われるように、むしろ私たちに求められるのは、どのようにウイルスとつきあい、共に生きていくのかということではないでしょうか。

日本でも、この秋から冬に感染の第二波、第三波がやってくることが指摘されています。そこで、最近、よく言われるようになったのが、「New Normal」「新たな生活様式」「新たな日常」といった、ウイルスとの共存共生を前提としたライフ・スタイルの提唱です。本学でも、3月以降、卒業式や入学式を始め様々な行事等の中止や延期、教職員・学生の大学構内への立ち入り制限及び施設の利用禁止等の措置を取りました。また、5月25日から始まった春学期の授業をすべて遠隔授業とするなど、従来の大学生活の日常が大きく変わらざるを得なくなってしまいました。ここで問われるのが、現在の状況が収束した後の大学の日常をどう考えるかということです。元の状態に完全復帰するのか、それとも、この経験を基に大学における「新たな日常」を創り出していくのか、教職員、学生共に、どの方向に進もうとするのかが問われてくるのではないでしょうか。

学ぶことはかわること（再び）

5月18日の『日本経済新聞』朝刊に掲載された「遠隔授業　現場では」という記事で、横浜創英中学・高等学校長の工藤勇一氏が次のように述べています。「学びとは本来、主体的なものだ。しかし日本の教育は子どもに手をかけすぎている。学力向上ばかりを唱え、そのためのサービスを与えることに躍起になり、結果として学習時間は伸び続け、最も大切な主体性・自律性を奪ってしまっている。サービスに慣れた子どもは次第に際限なくサービスを求めるようになる。」(1) その上で、「自学と協働を中心とした自律型学習」への移行の必要性を示しています。遠隔授業は、単に課題提示、オンデマンド、リアルタイム双方向といった授業の形式を意味するのではありません。大切なのは、先生がいて生徒がいてみんなと一緒に同じ教室でという対面式の授業で、ともすれば見過ごされてしまうことがあった「自らを自律的な学習主体として確立する」ということです。教室という固定的な時間と空間を離れ、自分自身の学びの場を主体的に整え、個性的な学びを創り出していくことに、遠隔授業を充実させることの真の意味があるのではないでしょうか。

昨年の第22回学部長メッセージで、宮城教育大学元学長の林竹二氏の「学ぶということは、覚えこむこととは全くちがったことだ。学ぶとは、いつでも、何かがはじまることで、終わることのない過程に一歩ふみこむことである。（中略）学んだことの証はただ一つで、何かがかわることである。」(2)【＊（　）は筆者】を紹介し、それは、「大学は学問を通じての人間形成の場である」という本学の建学の理念にも通じている、と述べました。この意味をもう一度考えてみましょう。

工藤氏の発言、林氏の発言どちらにも共通するのは、「学びとは他者から与えられるものではなく、他者とのかかわりの中から自ら創り出していくもの」という考え方です。今回の新型コロナウイルスとのかかわりの中から、私たちはどのような学びを、どのような大学生活を創り出していくのでしょうか。対面授業に戻るにせよ、「遠隔と対面のハイブリッド型の授業」(3) になるにせよ、私たちは、学んだことの証をどのように表すのでしょうか。遠隔授業を通してその答えを見つけていきたいと思います。

（執筆日・2020年6月1日）

(1) 工藤勇一「遠隔授業　現場では」（『日本経済新聞』2020.5.18朝刊14面）
(2) 林竹二『教えるということ』（国土社、1990、pp.105-106）
(3) 工藤、前掲書